

虫 封 じ

吉岡 郁夫*

疳という病気

疳あるいは疳の虫の民間療法についての報告はきわめて多いが、疳という病気そのものについて書かれたものは意外に少ない。これについては、私の知る範囲で述べたことがある（吉岡 1997）。これと多少重複するが、話を進める都合で、疳とはどういうものかを述べることから始めたい。

日本では古くから、疳という病気があり、それは疳の虫によって起こるといわれている。民間では、この病気について何となくわかっているような気になっているが、あまりよく理解されていなかつたらしい。納得できるような説明をした本や報告が少ないのである。

戦前、広く使われた家庭医学の本に、築田多吉（海軍看護特務大尉）著『家庭に於ける実際的看護の秘訣』がある。表紙が赤いので「赤本」と呼ばれ、大正14年（1925）に初版が出て以来、増補を重ね、昭和29年までに1600版、14万冊も刊行された。超ロングセラーである。健康保険の普及していなかった時代、祈願や祝いを除き、現代医学の立場から有効と考えられる民間療法が多く収録されている。これを見ると、疳については「食飢性中毒症、または消耗症だろう。消化不良か」とあいまいな説明がある。かと思うと、別のところでは「栄養不良からくる種々の疾患。目にくると疳の目といい、目が見えなくなる」と書かれている（築田 1940, p.354・770）。前の頁では消化器疾患、後の方ではビタミンA欠乏症と思わせるような記述である。

近ごろは、疳の虫という言葉をあまり聞か

*日本民俗学会会員

なくなったので、もう死語になっているのではないかと思ったが、念のために、手もとににある数冊の国語辞典・漢和辞典を引いてみると、どれにも「疳」という項目が載っている。それには、神經質で興奮しやすい性質、食べすぎ、神經性のひきつけなどをあげている。ただ共通しているのは、これが子供の病気ということであり、私も大人の疳の虫が出たということは聞いたことがない。

明代の李時珍の編集した『本草綱目』（1590）の42巻に、「蛻虫（かいちゅう）」という項目がある（木村ら訳註1976, p.392）。その内容は、人の腹の中には9種類の虫がいるといいながら、10種類の虫を記している。そこには、「疳」とか「疳虫」という言葉は出てこないが、諸病の病因は虫によってひき起こされる、という考え方方が示唆されている。

日本では、江戸時代に、多くの病気が虫によって起こると考える流派があり、このような考え方方はおそらく、『本草綱目』が紹介された室町時代まで遡ると推測される。江戸中期、香月牛山の『小兒必要養育草』（元禄16年、1703）には、「疳虫」の名が見え、五臓にはそれぞれ疳疾があるという。子供に甘いものをたくさん与えると、それによって腹の中に虫が湧いてくる。これを疳虫といい、これが子供にいろいろの病気を起こすという（田中 1991, p.66）。赤本や辞書に、さまざまな症状が出てくるのは、この辺の知識が民間に伝えられるようになったのだろう。

疳の虫の伝承

明治になると、政府は全面的に西洋医学を

採用することになったが、一方では、江戸時代からの伝統的な民間療法も健在であった。ところが、西洋医学では、疳についてはどこにも説かれていなかった。この時代には、医学の専門書なら、疳の虫など問題にしなくていいが、家庭医学の本ともなれば、それに対する治療も書いておかなければならぬ。赤本の著者は、西洋医学と民間療法とのはざまで、ずいぶん悩んだことだろう。疳の記述では、これに何とか医学的な解釈をしようと努めたことがうかがわれる。

民俗学関係の文献を見ても、疳あるいは疳の虫についての報告や記述は少ない。三崎が(1977, p.164)が、「疳の虫とは幼児の気性が激しく異常な行動をしたり、逆にひ弱だったり、食欲がなく夜泣きをしたり、顔に青筋が出るなど、子どもの体調が普通でないこと全般をこの虫の悪いと考えていたようである」と述べているのが注意されるぐらいである。

その他、断片的ではあるが、疳の虫についての伝承を拾ってみると、

子供の夜泣きはムシがおきている（宮城県多賀城市）（宮城県医師会 1979, p.83）
疳の強い子供は異様な形の虫（孫太郎虫）¹⁾を好んで食べる（宮城県）（三崎 1977, p.164）

炭やかたい物を好む子供はカンが強い（同上）（同医師会, p.85）

子供が急に泣き出したり、むづかったり、夜泣きしたりすると、疳ができるとか疳虫がたかったという（新潟県）（横山 1976, p.180）

子供が壁土など常食以外のものを好むようになるのは疳虫のためという（大阪府）（小谷 1977, p.117）

香川県綾歌郡加茂村（坂出市）には、「疳の虫おろし」といって、子供の疳の虫を灸でおろす人がいたといわれ、それによって子供の機嫌がよくなり、頭脳も明晰になるといわれている（加藤 1935, p.74）

これらの報告をまとめてみると、疳の症状はさまざまあって、捉えどころがない。食欲がなく、虚弱であったり、顔に青筋があるというような身体症状が見られることがある。一般には精神症状が主体のようで、夜泣きをしたり、むづかったり、異常な行動（異食症など）をとるのは疳の虫のためだと考えられ、その虫をおろすと疳が治ると信じられていた。

虫封じ

疳の虫が子供の体内で悪さをしないように、虫封じの祈願をしていた社寺は全国各地にあった。最近では、疳の虫ということをあまりいわなくなり、それを知らない人が多くなったせいか、虫封じを行っている社寺は少なくなっている。

全国的には共通しているのは、子供の手のひらに墨で呪文や特定の字を書いて、神主か僧侶がお払いをしたり、お経をあげたり、呪文を唱えたりした。手のひらに書く文字や呪文などはそれぞれの社寺によって異なる。その結果、子供の指先の爪の間から白い細い虫が出るという。これが疳の虫の正体らしい。

疳の虫について、石口敏郎氏は次のような私信を寄せられたので、紹介する。

昭和27年頃、熊本から阿蘇に登る列車に乗って独り旅をしました。前の席には、法螺貝を持って兜巾をつけた山伏が坐りました。通路をはさんで、泣きじゃくる男の子に閉口した若い母親がいました。私は山伏に、「あなたは何をしているのか」と素朴な質問をしました。「ご祈祷をしています。たとえば頼まれば、あの泣きじゃくる子供のカンの虫を取り出してお見せします」と私の目の前にジュズをつまんで、ぶら吊げて見せました。山道の登り坂の途中で、列車が止って、逆走する方法（スイッチバック）で急坂を登つて行きました。「法螺貝は断崖にすむデンデン虫の種類で、この貝は2000年ぐらい

経っています」と教えてくれました。それが嘘であることは、後に辞書をひいて知りました。まことに、辞書といい、正しい知識というものは趣のないものであります。

この山伏が取り出してみせる、と自信をもつていった虫とは、白い細い虫のことであろう。この虫の正体はいったい何であるか、私には非常に興味がある。一度お目にかかりたいと思っているが、まだその機会がない。

民間療法としての呪いのなかにも、同じように、虫が出るというものがある。

○塩水か温水のなかに塩を入れ、その中に両手首まで入れ、長時間たって出すと、爪間から白く細い疳の虫が出てくる（栃木県）（日向野 1976, p.56・59）

○男児は右、女児は左の掌に3つの数字を書いておがむ。その手を太陽に透かしてみると、指の爪の間から白い絹糸のような虫が出てくる（埼玉県川本村）（柄原 1976, p.186）

このような呪いは社寺で行われていた祈願をまねたものであろう。おそらく以前には、この白い細い虫が疳の虫として、民間で広く信じられ伝承されていたと思われる。

この虫の正体はまだよくわからない。宮城県医師会（1979, p.85）でまとめた本によると、民間で「ムシ」という場合には、疳の虫によるものと寄生虫によるものとが混同されているという。腸内寄生虫で子供に多いのは、蛔虫と蟇虫だと説明しているが、疳の虫については何の説明もない。戦前から戦後しばらくまで、日本人の多くは何か寄生虫をもっていたものである。とくに農村では、ほとんどみんなといっていいほど、寄生虫が多くいた。疳の虫が体内に湧き、それがいろいろの病気、すなわち疳の原因になる、と民間で信じられていたのも無理はない。

私は田舎にいたとき、子供が排便した後、そこに長さ数ミリの小さな白い虫（蟇虫）が多く

数枚めいていたのを見たことがある。それを思い出してから、白い細い虫はこの蟇虫をイメージしたものではないかと想像している。

赤丸神事

『愛知県医事風土記』（愛知県医師会 1971, p.20）に、名古屋市千種区城山町の城山八幡社では、今でも虫封じを行っているとあるので、平成6年10月10日にそこを訪ねたことがある。宮司の吉田一玄氏は昭和40年ごろここに来られた方で、戦前の古いことは知らないということだった。

この神社で行っている行事は、乳児の頭の頂（大泉門）に朱を塗るもので、赤丸神事と呼ばれている。乳児の頭骨はまだ完成していないので、骨と骨が接するところには、骨化していない軟い部分がある。それらのうち、最も大きいのは、頭の頂上からやや前寄りにある大泉門である。この部位は生後およそ2年で閉鎖する。この軟いところから虫が入るのだそうで、そこにベニ（ペニガラ、酸化第二鉄）を10円銅貨ぐらいの大きさに塗る。その後で、鈴のお払いをする。祝詞はあげないという。

この行事は戦時に中断され、戦後復活したが、今ではその内容が変質している。吉田氏によると、若い母親たちは疳の虫や虫封じの意味を知らないので、説明をしている。親の方では、健康を祈願するという意識で行っている、ということであった。氏がここへ来られる以前から行われているので、復活した年はわからない。一度この行事を拝見したいと思っているが、なかなか都合がつかず、まだ果たしていない。

この稿を書いているうちに、疑問が浮かんできた。城山八幡社の赤丸神事によれば、疳の虫は頭の軟い部分から入るといわれ、そこにベニを塗るという。これに従うと、この虫は頭から入って、手の爪の間から出るようである。この行事は尾張地方特有のもので、他

府県ではあまり行われていないといわれる（愛知県医師会 1971, p.20）²⁾。

このような行事は愛知県以外にはなかったのだろうか。腹の中に湧くといわれているが、外から入るという伝承はなかったか。もし頭から入るとすれば、この虫はいったいどこからやってくるのだろうか。そして、体内に入った虫はどういう経路で指先まで移動するのだろうか。疳の虫が眼に来ると，“疳の目”（築田 1940, p.770）というところを見ると、この虫は体の中をあちこち動き回って悪さをするらしい。昔の人はこの虫の生活史？をどう考えていたのか、もし御存知の方があれば御教示願いたい。

謝 辞 本稿を終るに当って、赤丸神事について御教示下さった吉田 玄氏（名古屋市城山八幡宮司）ならびに私信の掲載を快諾下さった石口敏郎氏（東京都）に心から深謝致します。

註

- 1) ヘビトンボの幼虫。トンボ目ではなく脈翅目（カゲロウの仲間）。中部・東日本では疳の虫に著効があるといわれている。宮城県白石市斎川産のものが有名。
- 2) 同書によれば、同社の先代宮司の調査による。そして、宋の古来の使用方法からみて、南方あるいは中国から伝ったのか

も知れないという。

引用文献

- 愛知県医師会編『愛知県医事風土記』20～21頁、同会、1971
日向野徳久「栃木県の民間療法」『関東の民間療法』41～81頁、明玄書房、1976
加藤増夫「各地の民間療法 高松市地方」『旅と伝説』8年12月号、74頁、1935
小谷方明「大阪府の民間療法」『近畿の民間療法』105～126頁、明玄書房、1977
三崎一夫「宮城県の民間療法」『北海道・東北の民間療法』137～171頁、明玄書房、1977
宮城県医師会編『医療の言い伝え100題』宝文館、1979
李 時珍（木村康一ら訳・校註）『新註校定国訳本草綱目』増補版、10冊392～396頁、春陽堂、1976
田中 聰『ハラノムシ、笑う』河出書房新社、1991
柄原嗣雄『埼玉県の民間療法』『関東の民間療法』159～208頁、明玄書房、1976
築田多吉『家庭に於ける実際的看護の秘訣』1070版、南江堂、1940
横山旭三郎『新潟県の民間療法』『中部の民間療法』169～206頁、明玄書房、1976
吉岡郁夫「疳の虫」『名古屋民俗』51号、1～4頁、1997